

国際協力版「授業研究入門マニュアル」の開発（3）

研究代表者	桑山 尚司（留学生専門教育）
研究分担者	鈴木由美子（学習開発学講座）
	木村 博一（初等カリキュラム開発講座）
	山崎 敬人（初等カリキュラム開発講座）
	竹下 俊治（自然システム教育学講座）
	木下 博義（自然システム教育学講座）
	小山 正孝（数学教育学講座）
	影山 和也（数学教育学講座）
	棚橋 健治（社会認識教育学講座）
	草原 和博（社会認識教育学講座）
	岩田昌太郎（健康スポーツ科学講座）
	齊藤 一彦（健康スポーツ科学講座）
	丸山 恭司（教育学講座）
	吉田 成章（教育学講座）

I 研究の背景と目的

近年、教育の質改善の方法として授業研究が世界的に注目されている。広島大学教育学研究科は、国内外の授業研究に係る実践や研究の蓄積を有しており、2010年度からは国際的協力事業としてドミニカ共和国サントドミンゴ自治大学教育科学部（UASD-FCE：Universidad Autónoma de Santo Domingo, Facultad de Ciencias de la Education）における授業研究の導入と深化を支援してきた。その成果物の一つが、昨年度までに開発した「教師教育者のための国際版授業研究マニュアル」日本語版である。本年度の共同研究プロジェクトでは、同マニュアルのスペイン語版を作成し、本学の学長裁量特別事業経費「途上国における教師教育者養成・研修支援のモデル開発」（代表者：棚橋健治）や科学研究費補助金「途上国における教師教育者の養成・研修モデルの開発のための基礎的・予備的研究」（挑戦的萌芽研究、代表者：丸山恭司）の一部を活用して、ドミニカ共和国における事業への更なる貢献を図った。また、本研究科のホームページ上で成果を発信し、授業研究の更なる国際的発信に資する活動を行った。

本年度のマニュアルに係わる研究・開発は極めて実践的活動となったことから、本報告書では、まず本年度のドミニカ共和国事業（教育分野）の活動を報告する。また次に、2010年度以来の同事業の展開を示し、同マニュアルを多言語で作成したことの意義や課題を報告する。

II 本年度のドミニカ共和国における国際協力事業の概要

前述の特別事業経費や科学研究費補助金も活用して、本年度は事業全体で次のような活動を行った。

① UASD-FCE 教員の研修ならびに学部幹部との協議

- 第一回現地渡航（2015年9月20日～24日，丸山恭司・桑山尚司の2名）
 - ・ FCE 学部長及び学科長と協議し，授業研究の継続を図ることを再確認した。
 - ・ 授業研究を推進してきた FCE 中核教員（数学・理科・社会科・体育・教育哲学）や新たに取り組みたい教員（心理オリエンテーション学科，教育理論・マネジメント学科，幼年・基礎教育学科）に対してコンサルテーションを行った。
- 第二回現地渡航（2016年2月28日～3月3日，丸山恭司・山崎敬人・草原和博・齊藤一彦・桑山尚司の5名）
 - ・ 本共同研究で開発された教師教育者向け授業研究マニュアル（スペイン語版）を活用して，UASD-FCE 中等教育学科の教員と本研究科教員が共同で，新たに授業研究に取り組みたい教員に対する研修を行った。UASD-FCE 教員が同マニュアルの主説明を担当し，本研究科教員が質疑応答において補足説明した。
 - ・ UASD-FCE の教師教育カリキュラム改革において焦点となる教育実習の改善に向けて，広島大学の教育実習に係わる情報提供ならびに質疑応答を行った。
 - ・ UASD-FCE で最も熱心に授業研究に取り組む社会科・体育・理科の教員に対して，これまでの事業における成果と課題，今後の方向性に係るコンサルテーションを行った。

② UASD-FCE からドミニカ共和国内外への最終成果の発信及び式典

- 第三回現地渡航（2016年3月13日～15日，棚橋健治・丸山恭司・木村博一・木下博義・岩田昌太郎の5名）
 - ・ ドミニカ共和国高等教育科学技術省等からの来賓を招いて，これまでの事業成果を広くドミニカ共和国内外に発信する成果報告会ならびに記念式典を開催した。本研究科からは棚橋が基調講演を，岩田が成果報告を行った。

③ 日本国内における事業成果の発表

- 2016年1月10日，本研究科主催「現代社会の課題に応える教育学研究科の拠点機能の構築に向けたパイロット研究」シンポジウムにて成果を発表（桑山）。
- 2016年2月11日，：本研究科主催「教師教育者の専門性をいかに育成するか」国際シンポジウムにて成果を発表（岡村・草原）。

Ⅲ ドミニカ共和国における授業研究の導入と展開

1. ドミニカ共和国 UASD-FCE の概要

近年の国際的な学力評価・比較研究に対する関心の高まりは，ラテンアメリカでも例外ではない。同域内で共通の枠組みで学力の比較調査することへの機運も高まり，1995年から1997年にかけて小学校3年及び4年生を対象に算数と言語について第1回ラテンアメリカ学力国際比較調査（1998年に結果公表）が行われた。また，2006年に小学校3年及び6年生を対象に算数・理科・言語について第2回ラテンアメリカ学力国際比較調査（2008年に結果公表）が実施された。ドミニカ共和国は，両方の国際調査において最下位グループに位置する結果となり，このことが同国の教育界に強い衝撃をもたらした。

こうした状況を改善するために、ドミニカ共和国は教員養成制度の改革に着手した。高等教育科学技術省は、初等・中等教育を管轄する教育省やその他の関連諸機関と連携しつつ、「高等教育十ヶ年計画 2008-2018」「教育十ヶ年計画 2008-2018」に基づき、2010年に教員養成課程に係わるスタンダードを設定し、教員養成の質改善を図っている。また、教員養成を担う大学の体制を整備するために、UASDでは人文学部内に教育学科として存在していた教員養成課程を前身として、2008年に教育科学部（FCE）の設置が承認され、2010年から実質的に独立した。FCEでは、教員養成課程スタンダードに沿いつつ、UASD独自の使命や理念に基づいた新カリキュラムが策定され、組織作りと授業改善の取り組みが進められている。

UASDは、いわゆる新大陸最古の大学として1538年に創設された聖トマス・アクィナス大学を母体として、1914年に設立されたドミニカ共和国唯一の国立総合大学である。全土に分校を持ち、2010年度の総学生数は約17万人、総教員数は2770人であり、また新学部としてスタートしたFCEの学生数は約22,000人、教員数は192人となっている。FCEは、計6学科（教育理論・マネジメント学科、幼年・基礎教育学科、中等教育学科、体育・スポーツ学科、心理・オリエンテーション学科、図書館学・教育工学科）で組織され、同国最大の教員養成課程を擁する。他に同国の教員養成大学としては、旧来、義務教育終了後の中等教育と同格に位置づけられてきた初等教員養成の師範学校が、現在は教育単科大学となって存在する。しかし、最大の教員養成校として、UASD-FCEは新規教員の半数以上を育成しており、その教員養成課程を改善するインパクトは大きい。このような背景にあって、2010年度より事業が開始されたのである。

2. 事業全体における広島大学大学院教育学研究科の活動概要

この国際協力事業は、ドミニカ共和国の高等教育科学技術省やUASDの強い要望を受けて、2010年度から開始された。日本側の当初予算は、文部科学省から全学に対する特別経費「中米・カリブ海諸国をフィールドとした持続可能な発展に関する研究」ならびに科学研究費補助金「発展途上国の持続的発展を担う次世代育成システム改善に関する研究」（基盤研究（A）、代表：棚橋健治）による3カ年計画であった。また、UASD-FCEの事業推進予算は高等教育省からの支援を受け、日本への大学教員派遣等の航空券代等も同省から支出された。当初3年の成果は同国の高等教育科学技術省やUASD-FCEはもちろん本学学長に高く認められ、継続の要請を受けて、事業は2015年度まで継続した。

本研究科は、事前に彼らの教員養成課程や授業の内実についてその特徴と課題を十分に把握したうえで、共同事業を開始したわけではなかった。活動の拠り所となったのは、長い歴史の中で培われてきた広島大学大学院教育学研究科自身の教育実践の蓄積であり、授業を対象とする研究の蓄積であった。授業研究をUASD-FCEに導入する研修によって、同国の教員養成課程や授業を改善し、教師教育者を成長させることを図った。また、師範学校ではなく大学が教員養成課程を担うにあたって、授業を研究の対象とし、学問として確立させていく研究領域としての授業研究が、新しい学部であるFCEにおける学問的基盤の形成に資することを期待した。本研究科は、国際的社会貢献として事業を構想・実施し、6年間にわたりシンクタンクとして機能してきたといえよう。

表1 研修活動の内容と研究発表の実績

時期（機関）	場所	内容・テーマ等
2010年度		<ニーズ把握、方法検討>
8月22日～9月3日（9日間）	サントドミンゴ	【現地渡航】ドミニカ共和国における教育の現状把握
10月7日（1日間）	広島	【高等教育科学技術省メロ大臣来日】 日本の教育事情視察（附属小学校訪問等）
11月15日～24日（10日間）	広島	【第1回本邦研修】「授業研究とは何か」 「日本の教員養成に係わる研究と実践」
2011年度		<導入と実践>
5月30日～6月2日（4日間）	サントドミンゴ	【第1回現地研修】「教員養成における大学教育学部の役割」 「教師志望の学生の実践的指導力と研究力をどのように育成するか」
6月15日（1日間）	サントドミンゴ	【FCE主催フォローアップセミナー】「アクションプランの作成」
8月29日～9月2日（5日間）	サントドミンゴ	【第2回現地研修】 「授業研究を実践する（Ⅰ）：研究授業と検討会」
11月16日～24日（9日間）	広島	【第2回本邦研修】「授業を見る目を養う（Ⅰ）」 「ティーチング・ポートフォリオの作成（Ⅰ）」
1月17日（1日間）	サントドミンゴ	【FCE主催フォローアップセミナー】「授業研究とは何か」
3月26日～29日（4日間）	広島	【第3回現地研修】「FCE中間成果報告」 「授業研究を実践する（Ⅱ）：4教科の公開授業研究」
2012年度		<実践の質的深化と研究の成果発信>
6月13日（1日間）	サントドミンゴ	【第4回現地研修】 「ティーチング・ポートフォリオの作成（Ⅱ）」
6月15日（1日間）	サントドミンゴ	【成果報告】 高等教育科学技術省主催「第8回学際的科学国際会議」
9月23日～10月3日（7日間）	サントドミンゴ	【第5回現地研修】 「授業研究を実践する（Ⅲ）：4教科の公開授業研究」 「ティーチング・ポートフォリオの作成（Ⅲ）」
11月28日～12月4日（7日間）	広島	【第3回本邦研修】 「授業を見る目を養う（Ⅱ）：検討会の深化に向けて」
11月29日（1日間）	広島	【成果報告】広大主催「事業報告会」
12月6日～9日（3日間）	上海	【成果報告】「第3回東アジア教師教育研究国際大会」
1月14日～15日（2日間）	サントドミンゴ	【成果報告】FCE主催「最終成果報告シンポジウム」
2013年度		<実践の質的深化と研究の成果発信>
4月19日～21日（3日間）	サントドミンゴ	【成果報告】FCE主催「国際研究大会」
6月24日～28日（5日間）	ブエノス アイレス	【成果報告】「第15回世界比較教育学会」
7月11日～13日（3日間）	名古屋	【成果報告】「第50回日本比較教育学会」
9月22日～28日（7日間）	サントドミンゴ	【第6回現地研修】「授業研究における省察」 「授業研究を実践する（Ⅲ）：UASDイグエイ分校での授業研究」
11月27日～12月5日（9日間）	広島	【第4回本邦研修】 「授業の見方と記録のとり方：協議会で学びあうために」
3月18日～24日（7日間）	サントドミンゴ	【第7回現地研修】 「授業研究を実践する（Ⅳ）：理論編 事前検討－観察－事後検討の進め方」 「同：実践編 UASDサントドミンゴ本校での事前検討、 バラオナ分校での研究授業・事後検討」
2014年度		<実践と研究のとりまとめ>
9月23日～26日（4日間）	サントドミンゴ	【第8回現地研修】「授業研究を実践する（Ⅴ）」 ：サントドミンゴ本校での授業研究」
2月15日～17日（3日間）	サントドミンゴ	【第9回現地研修】「授業研究を実践する（Ⅵ）」 ：本校における授業研究とマニュアル化」
3月24日～28日（5日間）	サントドミンゴ	【UASD-FCEアサ学部長来日】授業研究の新体制に係わる協議

（広島大学大学院教育学科、「発展途上国の持続的発展を担う次世代育成システムの改善—ドミニカ共和国をフィールドとして教員養成の質向上に関する研究—」最終報告書（2013, p12）の岡村作成分に桑山加筆。2015年度分は、本報告書のⅡを参照のこと。）

研修は、2010～2012年度までは4教科グループ（数学・理科・社会・体育）を対象に始まり、2013年度からは教育哲学グループも加わった。研修の主たる対象となった FCE の中核教員は延べ 40 名ほどであった。前ページの表 1 に、2014 年度までの主な活動を示した。

3. 事業全体の成果と課題

【成果 1】 授業研究の意義や方法の理解

本研究科が開発・実施した研修によって、FCE の中核教員は授業研究の意義を認め、自らの授業において授業研究を実施した。特に 2010～2013 年度までの成果は、UASD のサンクトドミンゴ本校内とは別にいくつかの地方分校（イグエイ、バラオナ、サンチアゴ、サンフランシスコ等）で積極的に授業研究の導入が試みられたことにある。また、一部の附属等の学校教育現場、学協会へ発信された。2014 年度以降の体制変更に伴って組織的活動は弱まっている（後述）が、現在でも FCE 教員の著作の中で授業研究が紹介されたり、同学部の教育実習に対して授業研究を導入することが計画されたりしている。その内容は、彼らなりの教育・研究の蓄積において授業研究を意味づけようとする試みと評価できる。今後の UASD-FCE における授業研究の展開に期待したい。

【成果 2】 省察する態度の醸成

UASD-FCE の中核教員は、当初 3 年の各授業研究の成果をポートフォリオとしてまとめており、その記述の中に様々な成長をみとることができる。例えば理科グループ内の「学生の興味関心を高める」という課題に対して、学生のモチベーションは決して低くないということが明らかになり、データをもとに学生の実態が把握されたことが成果として述べられていた。また、当初は学生のみを対象化（問題視）して「学生の興味関心を改善するためのアクションリサーチ」という認識が変容し、課題を教師自らのうちに見出し、授業改善に取り組む省察の態度が徐々に培われている。

【成果 3】 授業観察・協議における視点の変化

聞き取り調査等の結果から、授業を観察する／される際の視点にポジティブな変化がみられた。以前の FCE 教員にとっては、授業を観察する／されることがチェックリストによる「欠点探し」あるいは「査定」のように捉えられていた。もちろん最初は授業を同僚に観察されることに抵抗感をもつ傾向にあったものの、授業研究を学ぶことによって、授業観察・協議の際に視点を定めて教授学習のプロセスをみようとするようになり、「どのように授業を改善するか」に注目するようになったとのこと。

【成果 4】 同僚性の涵養

2013 年度までの授業研究は、各教科のアクションプランをもとに組織的な取り組みとして行われ、教科グループごとに進捗の差はあるものの、全体として同僚性の向上に寄与した。中核教員のポートフォリオにおける記述や聞き取り調査から、「同僚の人柄を知り、授業に関する知見を交換する機会が増え、協力関係が構築されていった」という意見が多数あった。

【課題 1】 授業研究の制度化の難しさ

2014 年 2 月の UASD 学長ならびに各学部長選挙の結果、FCE でも学部長以下執行部の変

更があった。現在も授業研究を推進することで合意しているものの、学部内の体制は不安定である。2014年度以降は、高等教育科学技術省からFCEに対する予算措置も滞っている。各教科グループで中核となる人材が育ち、授業研究の分校への展開や教育実習への活用等、積極的な活動を志向していることから、今後の体制改善が待たれる。

また、上記のような課題の現れは、事業の持続性を担保するためにドミニカ側がトップダウンのアプローチを前提としていることも意味する。逆に、本研究科が授業研究を語る際に大切にしてきた省察する態度の醸成や同僚性の涵養は、ボトムアップのアプローチを前提とし、時間を要し、ときに苦しみを伴うものであろう。聞き取り調査では、しばしばFCE執行部のリーダーシップや予算措置等の重要性が語られたし、時間をかけて教員個人やグループ内で改善していくような研修スタイルへの負担感が語られたこともあった。

成果の項目で前述したように、授業研究の意義や方法は初期効果として伝わっている。今後のモデル構築・改善に向けては、省察や同僚性を授業研究の根幹に据えながらも、持続性を担保するための制度的・組織的要件を吟味していくことが必要となる。

【課題2】 授業観察・協議を焦点化する難しさ：

日本側からみれば、UASD-FCEにおける授業観察と協議の質には更なる改善の余地がある。例えば、①研究課題や授業のねらいに即した観察と協議、②記録に基づく協議、③学生の反応や変容に着目した観察と協議、④成果と課題の適切なまとめ等である。これらは、技術的な課題であるにとどまらない。これまでFCEで行われた協議会では攻撃的な発言や感情的な反応が見受けられることもあった。授業研究の前提として、他者との関係をどのように紡いでいけるかが課題となる。前述のリーダーシップの在り方や、個と集団の関係も含めて、社会文化的営みとして授業研究の持続性を担保する要件を吟味していくことも必要となる。

【課題3】 教育学・教育方法学・教科教育学に係る共働や交流の不足

日本側が不在の間でも、彼らなりの授業改善が展開されたが、研修や交流の機会としては短期間に限定された。2013年及び2014年の萌芽的活動を除けば、研究授業前に共働で教材研究等を行うことが困難であった。具体的に授業改善の場面に接する機会が少なかったことから、ドミニカ共和国の学校で子どもたちに育てたい力はどのようなもので、UASD-FCEがどのような教師を育てようとし、そのためにどのように教員養成課程や授業科目を編成し、各時限の目的・内容・方法を構成しようとしていくのか、踏み込むことができなかった。大学で行う教員養成に対する国際協力であるからこそ、今後、双方が土台とする学問的な知見を交流していくような機会を増やしていくことが必要であろう。

本共同研究の授業研究マニュアルは、6年間の事業における試行錯誤をとおした結果として開発された。今後、明らかになった課題を踏まえた更なるマニュアルの改善と授業研究の国際的発信が求められていくであろう。(桑山尚司*)

引用文献

広島大学大学院教育学科、「発展途上国の持続的発展を担う次世代育成システムの改善—ドミニカ共和国をフィールドとして教員養成の質向上に関する研究—最終報告書」, 2013.